徳田教授の退官にあたって

三石善吉

徳田教之教授は、この一九九五年三月末日をもって、本学を定年退官されることになった。定年退官は、ひとつの制度として、われわれの誰にも平等に訪れる別離の時ではあるが、われわれ社会科学系一同、とりわけ政治学専攻の教官にとっては、誠に、惜別の情、抑え難いものがある。

徳田先生は慶応義塾大学法学部を卒業後、同大学院に進まれ、石川忠雄教授のもとで「中国共産党の革命運動」について研究を重ねられた。一時、父君の希望に従って実務につかれたが、再び同大学院法学研究科に戻り、研究生となってさらに研鑽を積まれ、一九七五年三月には「毛沢東主義の形成と展開に関する研究」で慶応義塾大学から法学博士を授与されている。

先生は、慶応義塾大学大学院の研究生を一年間で終えられ、一九六〇年四月から一九七九年五月末日までほぼ一九年間、アジア経済研究所（調査研究部）に勤務され、この間、国立台湾大学・香港大学に二年間、カリフォルニア大学（バークレー）に二年間、研究のための留学をされている。先生が中国語・英語に堪能なのはこの遊学によるところも大きいのであろうか。

先生が本学に赴任されたのは、一九七九年六月、先生四八歳の時のことである。それから今日まで、およそ一六年間、本学系についていえば、一九八四年七月から二年間、社会科学系の学系長を務められ、また政治学専攻の陣容強化についていえば、多数の若き俊逸なる政治学者を学系に加えるなど、並々ならぬ努力をされて来られた。もちろん、この間、一九八二年七月から一年三ヶ月、北京大使館専門調査員として中国に在り、研究の旁らいささかの「忙中の閑」・「憩い」の時を楽しまれたようである。

さて、言うまでもなく、先生は現代中国の政治体制研究の権威者であって、学会活動や研究活動に精力的に取り組まれてこられた。研究活動について言えば、まず、ジェローム・チェンの名著『毛沢東―毛と中国革命』（一九六九年、筑摩書房）の緻密な名訳で知られ、ついで、博士論文を纏められた『毛沢東主義の政治力学』（一九七七年、慶応通信）で政治学的手法による中国革命史・政治史の研究者としての名声を不動のものとされた。これと平行しつつ、変転極まりない現代中国の政治についても積極的な発言をさまざまな雑誌などに精力的に発表された。

学会方面については、「アジア政経学会」の評議員・理事、「日本国際政治学会」の評議員、社団法人「アジア調査会」研究委員なども務められ、研究活動や校務と平行して極めて多忙であった。尤も、本学に来られてしばらく経って、先生は、「大学というところは、毎日来なくてもいいから、楽なところではあるね」と、言われたことがあったが、（もし、この言葉を先生が記憶されているなら）認識の錯誤に愕然とされるのは、それからまだ暫らく後のことになろうか。

先生の謦咳に接した人なら、誰でも、直ちに、率直で飾らぬその魅力ある人柄を理解できるであろう。先生は本年度をもって筑波大学を去られ、他の大学で研究・教育を続けられる事になるが、今後ともわれわれの先達として、末

永い御友誼を賜わるようお願い申し上げるとともに、先生のこれからの御健勝と研究の御発展とを切に願うものであります。